発　行　所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2－4－1
丸ノ内ビルディング６１７号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（3212）4007・1480
Fax（3212）1447
編集責任者　岡　沢　憲　芙
印刷所　関東図書株式会社
定価300円（年間購読料四千円）
1994年２月25日発行
No.283　第26巻２号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第３種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

No.283　Bulletin Vol. 26　No.2

Japanska Instiyutet Fof Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Instirute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi－Bldg.,No.617Marunouchi,Chiyoda－ku,Tokyo,Japan.

平和、人道のモデル国家

A Model Country of Peace and Humanity

北海道東海大学教授　武　田　龍　夫
Prof.Tatsuo Takeda

国際貢献と国際協力に関して北欧諸国の右に出る国は少ない。それほど賞讃に値する実績を有している国々であるが、それは何よりも平和と人道の分野において顕著である。

ここで北欧を代表する平和、人道のモデル国家スウェーデンの実情を一べつしてみよう。

先ず途上国援助である。これはもう非の打ちどころがない。六八年にＧＮＰ１％の目標を設定、七五年予算で達成、九三年は1.3％である。しかもグラントエレメントは100％に近い。またＯＤＡ計画実施では多く被援助国が決定権を有するし、それに殆んどがアンタイドである。バイの援助は人間生活の基本的要求（いわゆるＢＨＮ）が優先され、更に援助の効率化のため東南アフリカを中心として重点実施している。援助内容もキメ細かく債務過重国の重視と、比較的新しい独立国への援助優先とか、あるいは南米などで迫害された少数派、流民、家なき人びとに対する援助実施などのごとくである。メディア、世論も関心が高く、ＮＧＯ活動も活発であり、制度的にも実施面でもその整序は完全に近い。それに途上国援助は先進国の道徳的義務であるとの国民的コンセンサスが出来上がっている。スウェーデンの援助はＤＡＣ始め国際的にも高く評価されている。

他方平和協力でも同じである。コンゴで殉職したハマショルド国連事務総長はスウェーデン人であり、その構想から北欧の国連平和待機軍が生まれた（六四年）。志願兵から成る約一千名規模の常設待機軍だが、これまで十三回延べ五万人を世界中の紛争地に派遣してきた。犠牲者も二十名前後を出しており、ボスニアにも八七五人（内女性兵士二十五人）が送られている（ＰＫＯ、ＰＫＦの区別はない）。国連平和維持活動については毎年北欧国防相会議で意見、情報の交換が行われている。注目すべきことはスウェーデンは一八〇年の伝統的中立国で中立は国是である。しかし国連の前に中立はないとする立場なのである。かくてスウェーデンのブルーヘルメットは世界中でその声価を高めており、国内世論も一致してこれを支援している。ウグラス外相は緊急事態対応の特別待機軍設置と、そのための訓練施設のスウェーデン設置を国連で提案しており、その積極的な平和維持活動への貢献は世界の模範となっている。何も福祉のみでモデルなのではない。平和、人道への努力においても世界のモデルなのである。

目　次

平和、人道のモデル国家……武田　龍夫… 1
スウェーデンの精神医療―研究と臨床
……中嶋　義文… 2
保育政策に見る新たな動き…荒井　洌…… 3
お知らせ・SIPニュース …… 5
資料一覧Institute For Social Forsknink …… 6

スウェーデンの精神医療－研究と臨床

Psychiatric Research and Practice in Sweden

カロリンスカ病院精神科客員研究員　中　嶋　義　文
Karolinska Hospital,Guest Researcher,Dr.Yoshifumi Nakajima

精神医学は、脳をとりあつかうと同時に心をとりあつかうという複雑な領域にある。われわれ精神科医は、患者の脳の病態を科学的な眼で捉えるとともに、社会の中での患者の心の苦しみを軽減することを課題としている。この二つの課題はしばしば研究と臨床のバランスの問題として論じられる。スウェーデンはこの両面をバランスよく取り扱っているように思われる。スウェーデンにおける精神医療をとりまく現状を実感した話題を紹介したい。

現在のように神経科学の一分野と精神医学が見なされるようになったのは、1960年代に精神分裂病の薬物治療が可能となったことが大きな契機であった。抗精神病薬とよばれるこれらの薬物の薬理学的特性を脳内の神経伝達物質であるドパミン系との関係で明らかにし、その後の精神薬理学的研究に大きな影響を与えるとともに、精神分裂病のパーキンソン病などの治療を可能としたイェーテボリ大学名誉教授のアーヴィド・カールソン博士が、このたび1994年の日本国際賞（Japan　Prize）を授賞した。博士は現在でも神経伝達物質系の相互作用について第一線で研究を行っている。

精神分裂病の脳研究では、現在の私の上司であるカロリンスカ研究所のラーシュ・ファルデ博士もヒトの脳のドパミン系をポジトロンエミッショントモグラフィー（PET）という画像技術ではじめて非侵襲的に定量することを可能にした第一人者である。このような研究によって脳機能とその病態の科学的解明が進むであろうことが期待されている。精神病が脳の病気であることが次第に理解されれば、現在の精神病患者に対する偏見も解消されてくるであろう。

このような研究の進歩にもかかわらず、精神分裂病の患者自身や、患者をかかえる家族の苦しみは万国共通に未だ存在する。本年１月にチャンネル１で放映されたドキュメンタリー「私の息子の生活（Mitt barns liv）」は、ある精神分裂病に罹患した青年と、その家族を正面からとらえた素晴らしい作品であった。ここで患者や家族自身の言葉で語られる悩み－周囲の無理解や偏見、医療に対する信頼と不信など－は私が日本での臨床で出会ってきた患者や家族のそれとまさしく同じであった。しかし、日本ではこのような形で患者や家族が語る言葉が生々しく紹介されることはほとんどない。取材者（ステファン・リンドクィストとペール・ストランドベルイ）に対する信頼や、医療スタッフや家族会の協力なくしては不可能であったと思われる。

社会サービスの質が問われる時代に、ユーザーの生の言葉ほど情報に富み、重要なものはない。スウェーデンでは、その生の言葉に耳を傾ける姿勢があると実感した。先にのべた質の高い研究と、患者の心に向き合う臨床の姿勢、そのバランスのよさはすべての精神医療に携わるものにとって学ぶところの大きいものであろう。

保育政策にみる新たな動き

～スウェーデンの保育の旅から～

New Trend of Pre-schooling Policy in Sweden

白鷗女子短期大学　教授　荒井　洌
Prof. kiyoshi Arai

プロローグ　保育政策の改革の時代を迎えて

現在、わが国の保育所保育のあり方が軌道修正されようとしている。

さかのぼれば、戦後間もない1947年（昭和22年）、児童福祉法が制定され、日本の児童福祉が新しい歩みを始め、保育所も晴れて市民権を獲得したのであった。

その後、戦後の困乱の続いた時代、急速な経済成長の時期、そして繁栄と冷え込みの時代へと、保育所は社会経済の動きとパラレルに歩んできた。要するに若い働き手を支える縁

の下の力、とりわけ女性の社会的活動の支えとして役割を果たしてきたのである。

しかし、公式的には保育所保育は家庭育児を補完するものとしての位置づけのため、現在の就学前の全乳幼児の保育所利用率である20パーセントという数値は、現在のシステムのままでは、おそらく上限の数値としてとどまることになると思われる。が、若い世代の女性にとって社会参加への意識は完全に

緑の庭園と楽しい遊び小屋

一般化しているのだから、この数値は他のより積極的な理念を打ち出すことによって大きく飛躍されるべきだと考えるのが、けだし当然であろう。ちなみに、スウェーデンにおける利用率は約70パーセントに達しており、ストックホルムにあっては85パーセントにも及んでいるのである。

ポイントは、子育てをする家庭を支援するための社会資源としての位置づけである。すなわち、誰でもが利用でき、かつ利用しやすい保育所をめざすということだと考える。

スウェーデン保育研究会

(社)スウェーデン社会研究所が設立されて間もないころ、自分はメンバーに入れていただき、第1回の視察団でスウェーデンを訪れた。そして、新鮮な驚きの目で保育の現場を見て歩いた。以来、幼児保育のことを通してスウェーデンとのおつきあいをさせていただいている。

あのころからすれば、日本の保育界もおおいに成長した。幼児保育のありようを、比較文化論的に見るゆとりも出できた。そこでわれわれは、「スウェーデン保育研究会」という勉強会をつくり、いろいろな角度からスウェーデンの幼児保育について関心を持ち、勉強を続けている。今回のスウェーデンを縦断しての保育の旅も、研究会が立てたプランである。

60年の歴史をもつ保育園
～ストックホルム～

ストックホルム市内の緑の豊かな住宅地にある、集合住宅の中につくられている保育園を訪れた。やや時代を感じさせる集合住宅なので、保育園が設置された年代を聞いてみて驚いた。すでに60年ほどたっているというのである。

私はかって、M.W.Child の "Sweden－the Middle Way" 1936（邦訳『中庸を行くスヰェーデン－世界の模範國－』を使って小文を書いたことがあった。（拙著『新世代の保育をデザインする』筑摩書房）なぜ書いたのかといえば、その本の中には1930年代の前半に新設されたと思われる保育園についての描写と、当時の写真までもが掲載されていたからである。

計算してみると、今自分が立っている保育園と、チャイルズが描写した保育園とは、まさに同年代のものではないか！よくよく聞いてみると、新しい政権の経済を担当していた、かのグンナー・ミュルダールと夫人とが、ときどき気にしてはこの園にやってきたとのことで、夫人はインテリアなどのお手伝いをしたとのことであった。このことは自分にとっては大いなる驚きであり、また感激でもあった。

福祉政策を推進する新しい政権にとって、勤労者の家庭を支え、女性の育児をサポートする保育政策は、スタートの時点から主要な施策だったと言ってよいだろう。時代はまだ、昭和の10年にもなっていないころのことである。

昼食のあと保母さんに絵本を読んでもらって

財政の厳しさの中での運営
～ソレンツーナ～

ストックホルムに隣接するコミューン（日本の市町村に該当する自治体）のソレンツーナは、幼児保育に関する施策において、かねてより先進的な自治体である。ソレンツーナの役所を訪れると、ばったりと旧知のヤンさん（Jan Simon）に会った。（前揚の拙著参照）彼はリーダー的な存在である。

そこでは保育行政の内情について詳しく聞くことができたが、目下の課題は厳しい財政事情の中でのやりくり算段とのことであった。税収の落ち込みによる財源の不足に加えて、保育者の定数も下げられているのだから苦労は大変である。そ

の結果、利用者との関係はバウチャー・システムが取られるようになってきたとのこと。要するに、公立の園であっても経営努力が求められるようになったということである。

このような傾向はソレンツーナに限ったことではない。スウェーデン全体がこのような方向に進んでいることが、今回の保育の旅で確認することができた。保育所運営についての経営感覚の導入と、仕事の効率化である。

スウェーデンの保育園をあちこちと見て歩きながら、ふと思ったりもした。わが日本の現状は、まだまだ甘いのではないか……。

緑のさわやかな保育園
～イエテボリー～

X2000という、新しい世紀をイメージするような名前のスウェーデン版新幹線に乗って、東海岸にあるストックホルムから、西海岸の港町であるイエテボリーに向った。歴史と潮風の香りのする大きな町である。

お母さんも小どもたちといっしょに遊びます

大学や教会など、古風なたたずまいの地区の保育園も訪れたが、ボルボの工場などがある郊外の保育園にも出かけてみた。たまたま新設の保育園があったのでおじゃまさせていただいた。

さわやかで、シンプルなデザインで、そして美しい。園庭も、園舎内も美しい。センスの感じられるカラー・コーディネイションがみごとである。そこで考えてみる。そもそも、なぜ日本の園庭は学校のグランド風なのだろう。なぜ、「園庭」という本来の字義に忠実たらんとはしないのだろうか。

訪れた園は、どこも自然の起伏を上手に利用して園庭をデザインしている。自然のままの木立ち、なだらかな緑のスロープ、外からすべてが見渡せる、文字の通りのKindergartenである。

自然に親しむなどというスローガンは、何百回口にしたところで意味はない。まずは、エコロジカルな園庭に作り変えることではないだろうか。

とにかく緑の園庭は、のびのびと動き回る子どもたちの背景としては、これ以上のものはない。

外国の子どもたちと仲良く
～マルメ～

マルメはスカンディナビア半島の最南端の町であり、デンマークのコペンハーゲンとは目と鼻の間である。ということは、昔は北の勢力と南の勢力との支配権をめぐる争いの場であった。古風な城塞は、つわもの共の戦い合った姿をほうふつとさせてくれる。

現在のマルメは、活気に満ちた国際都市である。そのため、保育園にはいろいろな国籍の子どもたちが集まっている。町の中心部の、ある保育園で聞いて驚いた。50名の定員で、12か国の子どもがいるというのである。

しかし、子どもたちが遊んでいる姿には何の屈託も見えない。天真らんまんである。子どもは、まこと可塑性に富んでいる。

問題なのは保護者のほうである。生活文化の違いは、とても大きな壁になっている。国際的なセンスなどと言っても、現実の対応は難しい。自らの生活文化についてのアイデンティティーを意識して持たねばならない時代になったのだと思う。

わが日本においても、この問題についてのガイドラインが求められている。関係者は、しっかりとした理念と内容のものを提示しなければならないと思う。

子どもたちは私たちを歓迎してくれました

エピローグ　窓辺の青い鳥

スウェーデンの園舎の窓辺は、外から見ても、内側から見ても、実にロマンチックだ。そのまま日本に持ち帰りたいくらいである。しかし、そうはいかない。青い鳥は自らが育て上げる以外に道はない。

新しい時代の新しい課題を前にして、われわれはフロンティア精神を持たざるを得ない。スウェーデンの保育政策は、いろいろなヒントを投げかけてくれている。それだけでも、とてもありがたいことなのだ。

写真撮影：スウェーデン保育研究会

お知らせ

スウェーデンの国民画家

カール・ラーション展CARL LARSSON

1994年４月23日（土）～５月31日（火）

開館時間：午前10時～午後６時（入館は午後５時30分まで）
休 館 日　４月27（水），５月11日（水），25日（水）
場　　所　**東京庭園美術館**
〒108　東京都港区白金５－21－９
ＪＲ山手線、東急目蒲線　目黒駅東口より徒歩７分
主　　催　㈱東京都文化振興会、スウェーデン国立美術館
美術館連絡協議会、読売新聞社、日本テレビ放送網
後　　援　外務省、文化庁、東京都、スウェーデン大使館
協　　賛　花王株式会社、住友海上、エリクソン東芝通信システム
協　　力　スカンジナビア航空、東急グループ
入 場 料　一般・大学生600円（480円）小・中・高生300円（240円）
（）内は10名以上ノ団体料金幼児・65歳以上、教師の引率する小・中・高生は無料

このたび東京庭園美術館にて、スウェーデン人が最も愛する国民画家カール・ラーション（Carl Larsson 1853－1919）の日本で初めての回顧展が開催されます。

〈ＳＩＰニュース〉

緑内障の記録のための植え込み式眼球内レンズ

ウプラサラ大学眼科技術の研究グループによって、此の程、緑内障の記録を目的として、眼圧センサー（ＩＯＰ）を内蔵したレンズを眼球に埋め込む技術が開発された。この種の先導者であるヴェスデルオースのヘーク・インストルメント社（Hok Instrument AB）のベッティル・ヘーク博士（Dr. Bertil Hok）によると、同技術は眼球内レンズ（ＩＯＬ）と衛生の類似性に基づいて、眼球内の小宇宙に応用されたものだという。

今日に至るまで、緑内障をわずらう患者は手術前もしくは投薬の決定のための眼圧を記録するのに、局部あるいは全身麻酔をかける必要があった。

ＩＯＰは膜組織によって調整されるうずまき部品とコンデンサーによる容量誘導サーキットよりなる。同センサーはいかなるエネルギー源からも独立しており、共鳴周波数の現実の波長は、外部の探知器からの電波によって測定され、眼圧のレベルに相関させられる。

同センサーは最小で長さ２A、厚さ0.6A、重量6Mにまですることができるが、製造にあたってはシリコン素材と接著技術を利用するミクロ機械技術を用いる。なお、これは内部抵抗及び迷容量に関する問題を最小限に抑えることを目的としている。

研究者達によれば、新測定技術の大きなメリットは、それが緑内障診断の知識及びその自然な進行を変えるような基本的データを生み出す店であるという。また、同センサー目が様々な治療――外科的及び内科的治療――にどのように反応するかを示すことができる。なお、同システムは未だ研究段階にあり、手術も動物実験しか行われていない。

（SIP 298/93）

INSTITUTET FÖR SOCIAL FORSKNING

8/1991 COMPENSATING WAGE DIFFERENTIALS VERSUS EFFICIENCYWAGES. An Fmpirical Study of Jod Autonomy and Wages by Mahmood Arai

1/1992 A NOTE ON TEMPORARY LAYOFFS AND UNEMPLOYMENT INSURANCE by Ante Farm

2/1992 MACROSOCIOLOGICAL COMPARATIVE METHODOLOGY. ON REGRESSIONS, QUALITATIVE COMPARISONS AND CLUSTER ANALYSIS IN THE POLITICS OF SOCIAL SECURITY by Olli Kangas

3/1992 CLASS-POLITICS AND INSTITUTIONAL FEEDBACKS.Development of Occupational Pensions in Finland and Sweden by Olli Kangas and Joakim Palme

4/1992 IS THERE A STABLE SWEDISH WAGE CURVE? by Stig Blomskog

1/1993 HEALTH INEQUALITIES AS POLICY ISSUES - their moral and public health significance by Denny Vågerö

2/1993 SOCIO-ECONOMIC MORTALITY DIFFERENTIALS AMONG ADULTS IN SWEDEN - TOWARDS AN EXPLANATION by Denny Vågerö and Olle Lundberg

3/1993 A COMPARISON BETWEEN ACTUAL DISTRIBUTIONS OF ANNUAL AND LIFFTIME INCOME: SWEDEN 1951-1989 by Anders Björklund

4/1993 KINAS BEFOLKNINGSPOLITIK - BARNBEGRÄNSNINGSTVAND I VÄRLDENS INTRESSE? av Sten Johansson

5/1993 INTERGENERATIONAL INCOME MOBILITY IN SWEDEN COMPARED TO THE UNITED STATES by Anders Bjorklund and Markus Jantti

6/1993 PRODUCTIVITY AND PERCEPTION OF FAIRNESS: AN EXPERIMENTAL STUDY by Mahmood Arai and Hans lind

7/1993 WORKERS' INTERTEMPORAL STRATEGICAL BEHAVIOR UNDER INDIVIDUAL AND GROUP INCENTIVE SHEMES by Mahmood Arai and Yves Zenou

8/1993 CHOOSING AMONG ALTERNATIVE NON EXPERIMENTAL METHODS FOR ESTIMATING THE IMPACT OF TRAINING: NEW SWEDISH EVIDENCE by Håkan Regnér

（上記の資料はThe Swedish Institute for Social Research より定期的に寄贈されたものでありますが、ご要望の方にはコピーをお送りいたしますー事務局より）

第三種郵便物認可 昭和44年12月23日 スウェーデン社会研究月報 平成6年2月25日発行 第26巻 第2号 毎月1回25日発行 編集責任者 岡沢 憲芙 発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 定価三〇〇円